

BOOKS

久原正治

立命館アジア太平洋大学経営大学院 教授

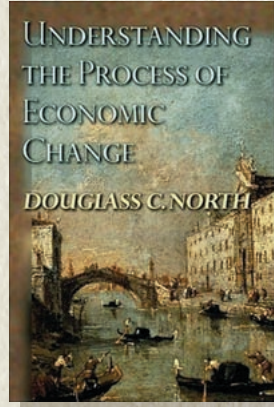
経済発展と制度変化

日本はバブル破綻後の長い経済低迷期間を通じ大きな経済諸制度の転換を進めている。それは従来の暗黙的な信頼に依拠した長期の取引関係に依拠したものではなく、より明瞭なルールや取り決めに基づいたアメリカ型先行モデルへの転換のように見える。しかし、仔細に見ればそこでは日本的な特質を残しつつ、既存モデルと

それを支える諸制度の進化によってもたらされる。制度とは公式、非公式のルールや取り決めのことで、制度進化の一般的特徴は人々や社会の直面する不確実性の削減にあるとされる。ノースの枠組みに基づいて、例えば金融制度の歴史的発展を考えてみよう。通貨の発明は物々交換の不確実性を、銀行の発達は資金需要者と供給者の間の情報の不確実性を、有限责任の株式会社と株式市場の発達は

確保のための所有権制度の確立が必要で、株式市場の確立には取引のルール、それをモニターする仕組み、法律家や会計士などのプロフェッショナルの存在、取引費用の削減などが必要となる。著者はさらに制度の経路依存の問題を提起する。国によってはその歴史や文化が特定の制度の導入を妨げるので、先行の制度をその国の基層に合致するように調整する必要が出る。

開発経済学者大野健一による良書である。大野はこの本を、海外の途上国から日本に学ぶ若き官僚たちに日本の制度的適応を経済発展に沿う大きな流れの形で教えるためのテキストとして書いたという。日本の歴史過程では、国内で進行する教育や文化をベースとした制度的な成熟と、外国特に西欧からもたらされた異質のシステムとの相互作用が進み、そこから経済発展のダイナミズムがもたらされ



① Understanding The Process of Economic Change
Douglass C. North
Princeton University Press
2005/01



② 途上国ニッポンの歩み
大野健一

大野健一
有斐閣
2005年2月

先行モデル間の相互作用により企業や組織の選択肢を増やす形の変化が進んでいる。

このような制度転換の方向を考える理論的基礎として、今回取り上げた二冊の本は実務家にも役に立つ考え方を提供している。

①は、ノーベル賞経済史学者ダグラス・ノースによる経済発展のプロセスに関する最近の議論をまとめたものである。ノースによれば、経済発展は

資本と経営の分離を通じ資本調達の不確実性を削減した。保険の発達はさまざまな不確実性をヘッジできる手段を提供した。このようにして、金融における不確実性はさまざまな制度の進化により予測可能なりスクに転化され、その結果経済の発展が達成された。その制度はさらにそれを支えるサブシステムの発達に支えられている。銀行制度の発達には、借り手に関する情報問題を解決する担保

その結果制度には多様性が生じることになる。面白いことにはアメリカという国は過去の歴史や慣習を持たない特殊な国で、それゆえ不確実性の削減の可能性を多く持ち、諸制度がグローバルな基準になる一種の理想モデルの形で発展してきたと言えよう。

②は、途上国がその制度設計を行う際に参考とすべき国が日本であることを、途上国としての日本の近代化の歩みという独自の観点から描いた

ていった。例えば、江戸時代から積み上げられた藩校や寺子屋による教育は西欧の近代哲学思想や科学技術導入の基盤となり、日本の伝統にあわせた制度の進化により明治の急速な近代化が可能となった。著者は、日本がさまざまな外的ショックに適応し、そこから新たな段階への制度転換が進むさまを、日本の近代化への翻訳的適応過程と位置づけ、具体的事例でそれをわかりやすく説明している。